

氏名	喜多嶋拓士
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博乙第 4125 号
学位授与の日付	平成18年6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Recent Improvement in Lung Cancer Screening : A Comparison of the Results Carried Out in Two Different Time Periods (肺癌検診における近年の成績向上 : 異なる2つの時期における検診結果の比較から)
論文審査委員	教授 伊達 洋至 教授 吉野 正 助教授 猶本 良夫

学位論文内容の要旨

近年の肺癌検診の成績向上を評価する目的で、我々は2つの異なる時期に行われた検診結果の比較、検討を行った。当研究においては、1976年～1984年(前期)と1989年～1997年(後期)の検診で発見された肺癌患者の予後を比較している。

前期に発見された肺癌患者276人に対し、後期は541人が発見され、生存期間中央値は前期27.8ヵ月に対し後期49.8ヵ月、5年生存率はそれぞれ34.8%と47.8%であり、いずれも後期が有意に優れていた。また、手術療法を施行された患者の内、病理病期I期のものの割合は後期では60.8%であり、前期の54.9%に比べ有意に高値となっている。多変量解析では、検診時期(後期)が有意な予後改善因子であることが示されている(ハザード比0.685、95%信頼区間0.563～0.832、 $P=0.0002$)。

以上の結果は、近年我が国において行われた、症例対照研究による肺癌検診の効果判定によっても示されており、前期に比べ後期において著明な検診効果の向上が見られている。

論文審査結果の要旨

本研究は、肺癌検診の有効性を検証するために、1977年～1987年(前期)と1989年～1997年(後期)の成績を比較検討した後ろ向き研究である。後期検診で肺癌患者の生存率は、前期検診で発見された患者よりも有意に良好であり、また、多変量解析でも後期検診が有意な予後因子であることが示唆された。しかしながら、二つの検診期間で、対象年齢、レントゲンフィルムや装置が異なっており、結論には議論の余地を残している。

日本の肺癌検診システムは世界で最も優れており、最近ではCT検診が導入されるようになった。本研究は、今後CT検診の有用性を検証するさいのコントロールとしても高い価値があるものと思われる。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。